

顕彰状

河竹登志夫（筆名）先生は、1924年12月7日、東京に生まれ、父河竹繁俊の俊と、坪内逍遙の本名「雄蔵」の雄とをあわせて俊雄と名づけられた。江戸歌舞伎作者の巨匠、河竹黙阿弥の養孫で、歌舞伎の学術的研究体系の基礎を築いたといわれる父河竹繁俊と、その師坪内逍遙の影響を受けつつも、若き日には、むしろ純粹理論に惹かれ、1943年東京帝国大学物理学科に入学、小平邦彦助教授（フィールズ賞受賞）のもとで研究助手を勤めたこともある。しかし東京帝国大学を卒業した後、1949年、早稲田大学文学部芸術学演劇専攻に入学、演劇研究に物理学、心理学の方法を導入した「演劇における場の理論序説」を卒業論文として、大学院文学研究科へ進んだ頃から、比較演劇学研究への道を歩み始めた。そして、早稲田大学文学部助手、講師、助教授を経て、1964年教授となり、1990年に退任するまでの36年間、文学部の教壇にあって、国の内外に多くの人材を送り出した。また、1997年までに三十数回にわたり海外に出向き、ウィーン大学の客員教授を勤め、数々の講演を行い、国際会議に出席する一方、とりわけ歌舞伎・能における海外公演の草分け期には、ほとんど毎回のようによい文芸顧問を依頼され、これらのあらゆる機会を通じて、歌舞伎をはじめとする日本演劇を、世界に向けて学問的かつ解りやすく精力的に紹介した功績は、誠に大である。

河竹黙阿弥の曾孫として、江戸文化への強い愛着を常にもちながらも、先生は歌舞伎をどこまでも客観的対象として捉え、日本演劇と西洋演劇との比較演劇学の方法を確立された。その学際的視野の広さと理論に具わる明晰さは、国内はもとより海外でもきわめて高い評価をうけている。

先生の著書は、これまでに、実に80冊にのぼる。なかでも、1967年芸術選奨文部大臣新人賞を受賞した『比較演劇学』、1977年芸能学会特別賞を受賞した学位論文『日本のハムレット』、大学で演劇を講ずる研究者の多くが座右の書とする『演劇概論』、2000年恩賜賞・日本芸術院賞を受賞した『河竹登志夫歌舞伎論集』などは学術的名著として高く評価されよう。また黙阿弥、系女、繁俊、登志夫、4代にわたる河竹家の歴史を綴った『作者の家』（毎日出版文化賞、読売文学賞）は、厳密な考証に基づいたもので、すぐれた歴史小説にも通ずる高度な文学性をそなえている。さらに先生は、多くの歌舞伎等公演の演出・企画、文化的行事に携わり、現在も日本演劇協会会長、都民劇場理事長の要職にあるが、2001年には書き下ろしの『歌舞伎』刊行を機に、2001年度の文化功労者に認定された。

以上の業績と早稲田大学に対する貢献を称え、早稲田大学は名誉教授河竹登志夫先生を早稲田大学芸術功労者として永くその榮譽を顕彰するものである。

2002年9月20日

早稲田大学